シンポジウム報告　「宮沢賢治の作品にみられるキリスト教的表象」

賢治作品にみられるキリスト教的モチーフ
― 十字架とマリア像について

プラット・アブラハム・ジョージ（インド・ネルー大学）

はじめに

宮澤賢治と聞くとわれわれの脳裏に浮かんでくるイメージは、法華経信仰に無我夢中になって童話や詩歌の執筆をしていた、仏教至上主義者と呼んでもいいくらいの信心深い一仏教信者の姿である。こういうイメージを与えてくれる賢治の作品の中にキリスト教関係の言葉、モチーフそして思想がたくさん投影していることに驚かざるを得ない。賢治のような信心深い仏教徒がどうしてキリスト教のような異宗教の要素を自分の創作品の中に盛り込んだのか、その真相をつかむための証拠はあまり残っていない。実は、賢治とキリスト教との関係は、以前から指摘されているにもかかわらず我々読者の想像もつかぬ、見えざる謎めいた側面を持っている。その謎めいた側面を簡単に解き明かすすべが存在しないようだが、賢治に確かにあったと考えられるキリスト教の直接的・間接的影響の源はどこにあったのかを、故郷の花巻や教育現場であった盛岡などで活躍していたキリスト教徒との交際を背景として簡単に触れてから、作品中のキリスト教的モチーフや思想・世界観を分析してみることがこの小論の目的である。キリスト教のモチーフ・思想と言っても、賢治作品の中に具現されているすべてをこの小論の枠内に持ってくることはほとんど不可能だから、本論では賢治作品に見られる「十字架」と「マリア像」だけに限って論じたい。

賢治と交際があったと考えられるキリスト教者

生前に賢治に何らかの形で影響を及ぼしたと考えられるキリスト教者として、賢治が盛岡中学校時代に寄宿していた自彊寮の近くにあったプロテスタント系の浸礼教会の牧師ヘンリー・タッピング氏、時を同じくして盛岡に滞在しながら布教活動に励んだ盛岡カトリック四ツ家教会（盛岡天主公教会）の神父アルマン・プジェー師、花巻出身で内村鑑三の弟子として活躍していた斎藤宗次郎の三人の名前が特記すべきだが、そのほかにも賢治に影響を与えたというキリスト教者何人かがいたと考えられる。

※　本シンポジウムは、国際日本研究センター・比較日本文化部門・国際連携推進部門の共催により、2011 年 5 月 16 日、東京外国語大学本部棟中会議室で開催された。

ヘンリー・タッピング牧師

賢治の中学校時代・農林高等学校時代に盛岡で宣教活動していたヘンリー・タッピング氏（1857－1942）は、賢治の通っていた中学校の英語の先生でもやっていたが、賢治が盛岡中学校の一年生として入学した年（明治四十二年）の9月に英語教師のパート・タイム（非常勤務）を辞しているので、賢治は実際にタッピング先生に教わったことがないだろうと思われる。しかし、盛岡高等農林学校時代に賢治が浸礼教会にタッピングの聖書講義を聴きによく出入りしていたに違いない。賢治の詩歌にはヘンリ・タッピング氏を詠うものがいくつかあるが、特に「岩手公園」と題した詩の中にタッピング氏の家族員をすべて取り上げて詠っている。また、「ビヂテリアン大祭」[1]の中に出てくる「せいの高い立派なぢいさん」の宣教師ウィリアム･タッピングはおそらくこのヘンリー･タッピング牧師の面影であろう。タッピングが定期的に行っていた聖書中心の勉強会･講演会に賢治も時々参加したと言われるが、その目的は英語話者との直接的接触によって自分の英語能力を磨き鍛えることと異宗教であるキリスト教の教義を理解することだったのではないかと私は思う。果たしてそれはキリスト教への改宗を目指したものではなかったろう。いずれにしても、賢治はタッピングをかなり尊敬し、高く評価していた上、彼に深い霊感を受けていたに違いない。

プジェー神父

賢治が親しく交際していたもう一人のキリスト教宣教師はカトリック四ツ家教会（盛岡天主公教会）のアルマン・プジェー神父である。プジェー神父は明治三十五年（１９０３）から大正十一年（１９２２）までの間この教会に在任していた。日本の伝統芸術と文化に非常に興味を持っていたプジェー神父は、信者とだけでなく、地域社会の他の人々とも広範に交際していたといわれる。芸術品の収集を趣味としていたこのプジェー神父は貧しい人々の向上と幸福を目指した社会福祉的活動に献身的であったし、岩手地方で旱、寒夏などのため農作物が取れない大凶作の際、飢餓で苦しむ県民を救援する自己犠牲的活動をよく行っていたといわれる。似たような趣味を持ち、自己犠牲になってまで人々の幸福を計ろうというような宇宙観を持っていた賢治にとって、プジェー神父の活動は刺激の源であったのではないか。その証拠として、賢治の詩歌作品の中にプジェー神父を詠った短歌七首と文語詩一篇がある。だから何らかの形で賢治とプジェー神父が直接交際していたのではないかという論議はなおさら強くなる[2]。

斎藤宗次郎

賢治と交際していたもう一人のキリスト教者は花巻出身の斎藤宗次郎（明治十年（１８７７）～昭和四十三年（１９６８））だった[3]。もともと花巻市北笹間の曹洞宗の寺院の息子であった斎藤宗次郎は、花巻の本城小学校の教諭をしていたころひどい病にかかって入院したが、そのとき聖書を読んでまず感動し、同時に内村鑑三の書いたキリスト教関係のものも色々読んでみることによって、揺ぎ無いキリスト教信仰者に改宗した。この斎藤宗次郎は宮澤家によく出入りをしていたことは、彼の自伝とでも言える『二荊自叙伝　上』に記されている幾つかの挿話からもわかる。だから、賢治は子供のときから宗次郎と付き合い、頻繁に意見交換などをする機会が与えられていたことが推定できる。例えば、大正十三年

（１９２４）の宗次郎の日記には次のようなものがある。「新聞代金を受け取って後、今夜の宿直番たる宮沢賢治先生の乞いに応じ暖炉を囲んで遠慮なき物語を続けた。先生は主として語り予は時々首肯感動を示すのみにて謹聴した」[4]。要するに、後の賢治の宇宙観を形成するに当たって斎藤宗次郎との交流が果たした役割は非常に大きかったと考えられる。

賢治作品に見られる十字架と聖母マリア像

キリスト教的モチーフと思想が見られる賢治作品として以前から知られている作品は「銀河鉄道の夜」であるが、そのほかにもたくさんの賢治作品にキリスト教的思想とモチーフが具現されている。たとえば、「シグナルとシグナレス」「オツベルと象」「よだかの星」「ビヂテリアン大祭」のような散文作品、幾つかの書簡や短歌・詩の中にさえ見ることができる。これらたくさんのキリスト教的モチーフのなかで、特に「十字架」が賢治の関心の主要対象となっていたような気がするが、同時にカトリック教会と正教会で広く崇敬されている聖母マリアに対する関心も高かったと察される。 本論では、「銀河鉄道の夜」、「シグナルとシグナレス」そして「オツベルと象」を中心に上記の二つの項目について説きたいと思う。

賢治作品と十字架

賢治の「詩歌」の中にも童話の中にもモチーフとしての十字架の描写がよく見られる。たとえば、妹トシ子の死後、樺太への旅行中執筆された（大正十二年八月四日）「オホーツク挽歌」の中に＜それは一つの曲がった十字架だ／幾本かの小さな木片で／ HELL と書きそれを LOVE となおし／ひとつの十字架をたてることは／よくだれでもがやる技術なので／とし子がそれをならべたとき／わたくしはつめたくわらった＞と詠っている[5]。特に、十字架は＜ LOVE ＞つまり「愛」の象徴だと説く妹の説教を見下していた当時の賢治の目に映った十字架はやはり曲がった十字架であった。つまり、その時の彼には十字架の本当の意味がわからなかったということだろう。それで十字架が曲がっているものに見えたのだ。しかし、妹の死後、始めて彼にはトシ子が説こうとしたその「十字架」の本当の意味、その神秘的謎が分かるようになったと読み取ることができる。

また、大正十八年（１９２８）六月十五日執筆した詩「浮世絵展覧会印象」に＜やがて来るべき新しい時代のために／笑っておのおの十字架を負ふ／そのやさしく勇気ある日本の紳士女の群れは／すべての苦痛をまた快楽と感じ得る＞と詠っているところがある[6]。＜笑っておのおの十字架を負ふ＞という表現、それは教会の聖職者の口から常に聴かれる励ましの言葉で、キリストも福音の中で自分の十字架を喜んで負う者はきっと救われると約束している。賢治はこれらの詩を通して人は自分の十字架を積極的に負うと言うことは自分自身の救済と共に皆の幸せのためにも必要だというキリスト教的な考えを認めていると言える。

十字架のことを考えると何といっても「銀河鉄道の夜」に描かれている「北十字」と「南十字」ほど、人間の救いの象徴として崇められている十字架の栄光を描写している場面はほかにないと言える。

「銀河鉄道の夜」に出て来る十字架

賢治の作品の中でキリスト教的な雰囲気が一番濃く漂う作品は紛れもなく「銀河鉄道の夜」である。まず「銀河鉄道の夜」の構造を見てみると、第一章から第五章までは「現」の部分で、それ以降は最後の一章を除いて「夢」の部分となっている。その夢の世界は現実の世界と打って変わって、キリスト教的な雰囲気が漂っていることはとっても不思議に思われる。この夢の世界を分析して見れば分かるが、銀河ステーションと言う出発点から南十字までの旅の中で現れたり消えたりする世界は極めて複雑なものである。現実世界と人間の脳裏に潜んでいる天国のイメージが相まってできたその不思議な世界には死者も生者もいれば、死後の世界も現実の世界も描かれている。それに、神様も科学者も同一のところでそれぞれの役割を果たしている。さらに、「夢」の部分の描写には新約聖書の一部であるヨハネの「黙示録」を思わせるところがあることも見逃せない。仏教信仰者、科学者、地質学者、教育者でいる傍ら、異宗教の教えに深い興味を持っていた賢治の脳裏には、それぞれに関連する思想や教えが入り混じっていて、自分自身にとって理想とも言える一種の半透明な死後世界のイメージが構築されていたと思う。その死後世界のイメージを具体的に表現しようと「銀河鉄道の夜」を書いてみたのだろうが、そのイメージはあくまでもキリスト教的な雰囲気になったのは不思議に思わざるを得ない。

主人公ジョバンニの夢の世界には二つの十字架が現れる。つまり、「北十字」と「南十字」である。この作品の中で一番キリスト教に深い関係を思わせる部分もおそらくこれら十字架の描写の場面であるに違いない。まず北十字で、光の十字架が描写されているところを引用してみよう。

＜見ると、もうじつに、金鋼石や草の霧やあらゆる立派さをあつめたような、きらびやかな銀河の河床の上を水は声もなくかたちもなく流れ、その流れのまん中に、ぼうっと青白く後光の射した一つの島が見えるのでした。その島の平らないただきに、立派な目もさめるような、白い十字架がたって、それはもう凍った北極の雲で鋳たといったらいゝか、すきっとした金いろの円光をいただいて、しづかに永久に立っているのでした＞[7]。

キリスト教の教えによると、キリストの十字架による死と贖罪によって十字架が原罪から抜け出すすべがない人間の希望と救いの象徴に変わったのである。つまり、罪の克服を希う人間は自分の十字架を背負ってキリストの歩んだ苦難の道を従えば必ず救われるという約束である。ここに現れる十字架は「白い十字架」つまり光の十字架であることも大変面白い。「昔の神秘家と言われる人々や聖人たちが visiō の中で光の十字架を見た話はカトリック教会で

は多く伝わっていた。光の十字架はキリストの勝利と栄光を意味する」と言う上田哲氏[8]の指摘からも分かるように、聖人たちの幻視の中にいつも光の十字架が現れるのである。賢治も自分の作品の中に「白い十字架」を描いたと言うことの裏には、キリストの勝利と栄光を認識した上、それに人間の救いと希望があると信じるキリスト教徒の信仰の象徴とでも言える十字架の持つ重要性を容認する態度が現れているのではないだろうか。

それを裏付ける証拠に、十字架の周りで行われる祈りの場面を取り上げたい。

＜「ハルレヤ、ハルレヤ。」前からもうしろからも声が起こりました。ふりかへって見ると、車室の中の旅人たちは、みなまっすぐにきもののひだを垂れ、黒いバイブルを胸にあてたり、水晶の数珠をかけたり、どの人もつつましく指を組み合わせ、そっちに祈ってゐるのでした。思はず二人もまっすぐに立ちあがりました。＞[9]。

これは極めて神秘的な描写に違いない。列車が十字架の前を通るとき乗客は国籍や宗教などを問わず祈りはじめたのである。ジョバンニもカムパネルラも「思はずすぐに」起立して十字架への敬虔を表わしている。つまり、乗客は皆十字架の神々しさを信じているような描写に違いない。キリスト教世界に見られる「十字架への献身」、十字架こそ人間の救いの道であるという信仰の重要性に詳しくない人はこのような場面の描写ができないと思う。

「銀河鉄道の夜」に出てくるもう一つの十字架はサウザンクロス（南十字）である。北十字の駅は乗車する駅であったのに、サウザンクロスの駅は下車駅となっている。賢治のこのサウザンクロスの描写も短いけれども非常に神秘的で、カトリックの聖人たちがしばしば経験したと言われる「幻視体験」、もしくは、使徒ヨハネがパトモス島で見た天国の「幻」にすごく似たような描写である。

＜あゝそのときでした。見えない天の川のずうっと川下に青や橙やもうあらゆる光でちりばめられた十字架がまるで一本の木といふ風に川の中から立ってかゞやきその上には青じろい雲がまるい環になって后光のやうにかかってゐるのでした。中略。みんなあの北の十字のときのやうにまっすぐに立ってお祈りをはじめました。中略。「ハルレヤハルレヤ。」明るくたのしくみんなの声はひゞきみんなはそのそらの遠くからつめたいそらの遠くからすきとほった何とも云えずさわやかなラッパの声をききました。中略。そして見てゐるとみんなはつゝましく列を組んであの十字架の前の天の川のなぎさにひざまづいてゐました。そしてその見えない天の川の水をわたって一人の神々しい白いきものの人が手をのばしてこっちへ来るのを二人は見ました。＞[10]

北十字の十字架は「白い十字架」であったのに、ここに現れる十字架は「青や橙やもうあらゆる光でちりばめられた」華やかにぴかぴか光る十字架である。それはたぶん、永遠の喜びの場所でもある天国の入り口に立っているからであろう。それに、列車から降りた皆はこの十字架の前に立って、北十字と同じように手を合わせて「ハルレヤ・ハルレヤ」とお祈りを捧げているところ、ラッパの音が聞こえ、「一人の神々しい白いきものの人が手をのばして」

突然現れる。この神々しい人はやはり誰だろうか。キリスト教の父なる神ヤハウェ（Jehovah）だろうか、それともその愛する子イエス・キリストだろうか。

賢治のこの部分の描写には、また北十字の描写もそうだったが、一種の神秘主義的な雰囲気が漂っている。「神秘主義 mysticism とは目または口を閉じる意味のギリシャ語 myein を語源とする言葉で日常的な形而下の感覚世界を脱し、自己の内面的深みに沈潜することによって超自然的実在や超自然的世界を直接的に把握、これと一体化する宗教的体験」である[11]。このためにまず脱魂状態に入る必要があるが、ジョバンニは既に天気輪の下で脱魂状態に落ち、夢の世界に入っているのである。列車を降りた人々が十字架の前でお祈りしていたところ突然ラッパの声が聞こえ、そのあと神々しい人が出てくるのを見た。そのラッパの音をまだ下車していないジョバンニも聞いているわけだ。黙示録のヨハネもまず「脱魂状態になり、その後でらっぱのような大声を聞いた。（中略）その声は「おまえの幻を書き記し、（中略）七つの教会に送れ」と言った。そう話した声の方を見ようとして後を振り返ると、七つの金の燭台があった。燭台の間に人の子のような者が見えた。」と書いてある[12]。

ラッパのような音が聞こえて、その後「燭台の間に人の子のような者が見えた」と言うところは、上に述べた「さわやかなラッパの声」が聞こえて間もなく「一人の神々しい白いきものの人が手をのばしてこちらへ来るのを二人は見ました」という引用文にすごく似ているのではないか。おそらく、この「神々しい白いきものの人」は黙示録にヨハネが幻で見た「人の子」つまりイエス・キリストを想像して描き出したのではなかろうか。

上田氏は賢治の多くの作品に「エクスタース体験の反映が感じられるところがかなりみられる」と述べ、「堀一郎が magical flight と名づけたトランス状態における宗教体験が賢治にもあ」るので、「銀河鉄道の夜」はこういう異空間の幻視体験を文芸化・物語化したものではないかと指摘している[13]。もちろん、「銀河鉄道の夜」を含め賢治の多くの作品の中では、脱魂状態になって異空間を透視し、それを文章にしたようなものがたくさんあることは確かである。一つの仮説だが、賢治は聖書の黙示録からヒントを受けて、夢の中でキリスト教的な天国の雰囲気を漂わせる物語をわざわざ構築したのではないか。その裏には、上田氏の指摘した宗教的シンクレティズムの要素もあるかも知れないが、それよりも真の法華経信仰者であった彼は晩年になって、異宗教であるキリスト教の教えにも関心を持つようになったという理由もあるのではないか。

「シグナルとシグナレス」に見られる聖母マリア像

賢治作品の中に恋愛関係を描いた作品にめぐり合うことはあまりないが、「シグナルとシグナレス」はお互いに労わり合う恋人たちの純潔な恋愛関係が展開している作品の一つである。しかし、彼らの間に邪魔者が入ってきてこの二人の純潔な恋愛関係は思いの通り進まない。嫉妬心に満ちた有力者本線シグナル付電信柱の反対運動の結果、二人の恋愛関係はなか

なか実らず、結局「遠くの遠くのみんなの居ないところに行ってしま」おうとさえ考えるほど挫折な気持ちにむっとするようになる。しかし、彼らにその勇気はない。頼れる者もなく、とっても窮屈な立場におかれてしまった彼らは最後の道として天のほうへ眼を向けるのである。

そして、シグナルはまず＜あゝ、お星さま、遠くの青いお星さま。どうか私どもをとって下さい。あゝなさけぶかいサンタマリヤ、まためぐみふかいジョウヂス（チ）ブンソンさま、どうか私どものかなしい祈りを聞いてください＞と祈り、さらにシグナレスをも一緒に祈ろうと誘い、引き続いて＜あはれみふかいサンタマリヤ、すきと（ほ）るよるの底、つめたい雪の地面の上にかなしくいのるわたくしどもをみそなはせ、（中略）あゝ、サンタマリヤ。＞と祈り続ける。[14]

作品の中の祈りを見ると、カトリックまたは正教のキリスト教信者の誰もが親しみを感じずにはいられない。なぜなら、毎日の祈りの中で何回も＜慈悲ぶかい聖母マリア＞＜あはれみふかい聖母マリア＞などと聖母を呼びかけてその代祷で神様の恵みを祈念することがよくあるからである。キリスト教は周知の通り一神教宗教で、崇拝・礼拝の対象となるのは絶対存在の父なる神だけである。その他の命のあるもの、命のないものが崇拝の対象となることは絶対許されていない。これは、カトリックでも、正教でも、新教（プロテスタント）でも共通である。しかしカトリック教会と正教会では聖母マリアとキリスト教信仰のために献身的に一生を尽くした成人たちを崇敬の対象とすることがある。また一般の聖人は普通の崇敬の対象に、聖母マリアは特別崇敬の対象となっている。さらに、カトリック教会と正教では聖母は「イエス・キリストの母」であると同時に「神の母」でもあると教えているがプロテスタントの教えでは、マリアは夫ヨセフと交わる前に精霊によって処女のままイエス・キリストを生んだということを認めるが、聖母として、そして神の母としては認められていない。つまり、プロテスタントでは聖母が崇敬の対象となっていない。

こういうことを背景に、作品の中の「なさけぶかいサンタマリヤ」「あはれみふかいサンタマリヤ」の祈りの部分をさらに分析してみたいと思う。カトリック教会ではキリストの母であって、また神の母である聖母は「情け深い」「恵み深い」母で、人類すべての母でもあると教えている。そして、人間と神との間にいて代祷者の役を演じる聖母に捧げる祈りも数多い。その一つに聖母マリアの連祷があり、国によって中身が多少違うこともあるが、主に希求の祈りで聖母を様々な賞賛名で呼び出し、「我々のために祈りたまえ」と祈念する。日本のカトリック信徒も昔から聖母マリアの連祷を祈りの中でよく唱えてきた。毎日の実生活の中で苦難にあったり、思うとおり物事が進まなかったりするとき、必ず聖母マリアの代祷を乞うことがよくある。そのとき「慈悲深い聖母マリア、御子イエス・キリストにわれらのために祈りたまえ」「憐れみ深い聖母マリア、父なる神様にわれらのために祈りたまえ」などと祈るのである。それに、苦しいときも嬉しいときも、祈りが叶ったときも叶わないときも神に感謝をすると同時に聖母にも感謝の言葉を捧げることがよくある。まったくシグナルとシグナレスの祈り方もこれにそっくりだ。自分たちの純潔な恋愛関係は中に邪魔者が入っ

て、思うとおりに進まなくなったという苦境におかれているシグナルとシグナレスはまるでカトリック信者のように聖母に祈りかかる。そして夢の中で祈りが聞き入れられて、結局自分たちの外に誰もいない空の星の世界に導かれた二人は「僕たちのねがひが叶ったんです。あゝ、さんたまりや。」と聖母マリアに感謝の言葉を捧げるのを忘れていない。

「オツベルと象」に見られる聖母マリア像

また、「オツベルと象」の中にも似たような場面がある。「シグナルとシグナレス」では祈りと感謝を合わせて三回「サンタマリア」を呼び出しているのに対して、「オツベルと象」の中に「サンタマリア」を呼んで感謝の気持ちを捧げたり、「さようなら」をいったりする場面が、何と五回もある。オツベルに雇われ、彼のために一所懸命に全力を尽くしたと思う白象は、初日の勤めの終わりに「ああ、せいせいした。サンタマリア」と自分の喜びと満足感の気持ちを表している。しかし人や動物を酷使して利益を増やすことばかり考えているオツベルの象に対する態度が日々に残酷になっていくため象のサンタマリアへの挨拶が次第に「ああ、疲れたな、嬉しいな、サンタマリア」「苦しいです。サンタマリア。」「もう、さようなら、サンタマリア」と変わっていく。象は一度も「自分を救ってくれたまえ」とサンタマリアに直接祈っていないが、これら感謝の言葉に「自分をどうか助けてくれ」という意味合いが潜んでいるのではないか。つまり、彼は聖母に祈っているということである。

池上雄三は＜サンタマリアは、「おゝ大師」という賢治の祈りの声であって、マリアには意味がないと思われる。＞[15]と指摘しているが、それは果たしてそうだろうか、疑問に思われる。まず､揺るぎのない法華経信者であった賢治がどうして「おゝ大師」の代わりに「サンタマリア」と書かなければならないだろうか。その本当の意図はなんだったのだろうか。池上氏の言うとおり「サンタマリア」とは「おゝ大師」への「祈りの声」だとすると、賢治は「サンタマリア」を「おゝ大師」の異名として見ていたことになる。それよりも、釈迦である「おゝ大師」もキリスト教の「聖母」もそれぞれ異なる二つの宗教の聖人であるという認識の上、異宗教に対する自分の態度と理解を明確にする巧みな方法として賢治が作品中に「聖母マリア」を呼び、キリスト教的な思想･モチーフを取り入れたのだと考えたほうがもっと合理的ではないだろうか。

池上雄三氏の上述の説に対して上田哲氏が、仏教図像学では白象が釈迦の脇士である普賢菩薩の乗り物で、民間信仰では、象を普賢のお使いあるいは化身として崇めていると指示し「白象と法華経のこのような深いつながりを考えると、「オツベルと象」の白象も羅刹や鳩槃茶のようなオツベルの魔手を逃れるため法華経を読誦するとか、「南無妙法蓮華経」のお題目を唱え、普賢菩薩の援けを求める設定にしたらこれもぴったりの＜法華文学＞となったはずである。それにもかかわらず＜サンタマリア＞にすべてを託し、これを呼び求める。」のはどういう意味だろうかと強く反論している[16]。

さらに彼は、賢治が間世音様とも呼ばず、普賢菩薩とも呼ばないで、「サンタマリア」と呼んでいる裏にはそれなりの理由があったのではないかと反論し、賢治の中に既に形成されえていた宗教的シンクレティズムについて説くと同時に、マリア信仰の持つ浪漫性の芸術や文学への影響について知った賢治も自分の作品の中にわざわざそれを取り入れたのではないかという疑問も問いかけている。しかし、筆者は賢治の頭にあった宗教的シンクレティズムの実相はどれほどの深みを持っていたのかということに疑問を持つ。にもかかわらず、これらのことから考えると、賢治は聖母マリアに対して深い知識を持ち、それに、聖母を心の中で敬い、代祷者としての聖母マリアの地位を認めているような気がする。それは、おそらくカトリック教会、特にプジェー神父との交流の中で獲得されたものであるといえるだろう。

おわりに

賢治作品に見られる十字架とマリア像の描写は偶然に作品に入ったものだとは考えられない。異宗教の教えと教義に非常に興味を持っていた作家は自分の他宗教理解を深め、世界観を広げる目的でキリスト教をはじめ、各宗教の奥義を学ぼうと決心していたのではないか。つまり、賢治のキリスト教に関する関心は、自分が深く信仰していた法華経の教えと異宗教であるキリスト教の教えとの類似性に惹かれて、どれも基本的に同じではないかという意識から生まれてきた知恵の賜物であると言える。

注

1　宮澤賢治『＜新＞校本宮澤賢治全集』第9巻　（筑摩書房　1995年）の「ビヂテリアン大祭」221頁を参照。
2　プジェー神父についての詳細は、上田哲氏の前掲書『宮沢賢治　その理想世界への道程』を参照。（267～270頁）
3　斎藤宗次郎氏のことを詳しく知るには、栗原敦・山折哲雄編の斎藤宗次郎の日記『二荊自叙伝上・下』岩波書店　2005年を参照
4　斎藤宗次郎『二荊自叙伝　上』栗原敦・山折哲雄編　岩波書店　2005年　399頁
5　宮澤賢治『＜新＞校本宮澤賢治全集』第2巻（本文篇）　筑摩書房　1995年　173頁
6　前掲書　第6巻　1996年　38頁
7　前掲書　第11巻　1995年　138～139頁
8　前掲書『宮沢賢治　その理想世界への道程』204頁を参照
9　前掲書＜新＞校本宮澤賢治全集』第11巻　139頁を参照
10　同書　165～166頁を参照
11　前掲書『宮沢賢治　その理想世界への道程』291頁
12　カトリック教会是認の『新約聖書』の「ヨハネの黙示録」の1－10を参照
13　前掲書『宮沢賢治　その理想世界への道程』291頁を参照
14「シグナルとシグナルス」＜新＞校本宮澤賢治全集』第12巻（本文篇）筑摩書房　1995年　155頁
15　池上雄三　「オツベルと象　－　白象のさびしさ　－」『国文学』27巻3号　昭57－2　学燈社
16　前掲書『宮沢賢治　その理想世界への道程』　228～229頁